

石垣島白保竿根田原洞穴遺跡と南島の崖葬墓文化

片桐千亜紀

はじめに

白保竿根田原洞穴遺跡は琉球列島の南端海域に広がる八重山諸島のひとつである石垣島に所在する。遺跡は島の東海岸に面しており、現在の海岸線から約800 mの距離に位置し、現在は新石垣空港敷地内となっている。

2008年、新石垣空港建設に伴い、NPO法人沖縄鍾乳洞協会が実施していた鍾乳洞の測量調査中に人骨・獣骨・貝類等が発見され、同協会によって資料が回収された。2009年、琉球大学医学部（当時）の土肥直美氏と東京大学大学院新領域創成科学研究科（当時）の米田穰氏が中心となって、回収された人骨群の研究と年代測定が行われた結果、人骨群は近世、八重山先史時代無土器期、更新世（旧石器時代）に属することが明らかとなった（Nakagawa et al., 2010）。

この結果を受け、沖縄県教育委員会は本遺跡を「白保竿根田原洞穴遺跡」と命名し、2010～2016年にかけて沖縄県立埋蔵文化財センター及び沖縄県立博物館・美術館の人類班による発掘調査が実施された（仲座, 2013, 2017a・b, 片桐, 2019）。本遺跡はもともと新石垣空港建設に伴う緊急発掘調査の対象となっていたが、各種学術団体から遺跡の保存と精密な発掘調査を求める要望書が寄せられるなどがあり、その

重要性が考慮され保存することとなった。2019年11月には国史跡として答申された。

今回は本遺跡における旧石器時代の成果を中心に検討する。

1 洞穴の形成

遺跡およびその周辺の地質学的・洞穴学的調査によって遺跡を胚胎する白保竿根田原洞穴は、以下のように形成されたと推測された（石原・吉村, 2017）。

①中期更新世の高海水準期（MIS 9：33.7万年前）付近の海進期および高海水準期に、琉球層群大浜層に相当する、砂礫質石灰岩およびサンゴ石灰岩が累重する。②MIS 7（24.3万年前）およびMIS 5e（12.3万年前）の高海水準期において飽和水帯環境が形成され、洞穴の拡大が起こった。この洞穴空間の拡大は、少なくとも5万年前には遺跡周辺で比較的大きなホールを形成するほどであった。二次生成物の発達も顕著である。③MIS 5以降の海水準低下期に、重力的に不安定となった洞穴のホールの天井が落盤した。下位の砂礫質石灰岩は比較的溶食されやすかったのに比べてホールの天井は丈夫なサンゴ石灰岩からなっていたが、八重山諸島で多いとされる標高30～40 mでの巨大なホールの発達は、この天井を支えきれなかったと考えら

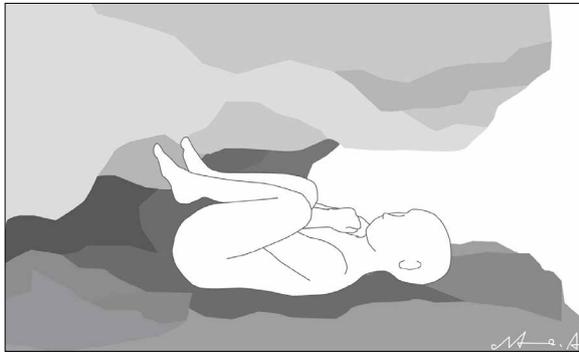


図2 白保4号人の葬送姿勢イメージ
(土肥他2017より転載)

ほとんど関節しており、解剖学的な位置関係をきれいに保っている。しかし、4号人骨はその配置から葬られた姿勢まで復元できるものだったが、様々なパーツに若干の乱れが見られるものだった。このことは、遺体が土中に埋まっていない状態で腐食して骨化したことを示している。露出された空間で骨化したことから、重力の作用と床の地形によって骨に乱れが生じたものと考えられる。つまり、死後、遺体は土中に埋葬されず岩陰に置かれて風葬されたと判断される。

この状況を踏まえると、ユニット2の人骨（1号人骨）検出状況は、この遺跡で行われた遺体の葬送行為をさらに詳しく知ることができる。人骨群は石灰岩の壁沿いとその平坦面に集中しており、最小個体数で6体分もの人骨が出土した。その内の1体分は壁に添うように頭骨、左右の大腿骨、寛骨がならんでおり、その配置はわずかなパーツながら解剖学的位置関係を保っていた。姿勢は4号人骨と同様、仰臥屈位と考えられる。この個体の他の部位や他の5体分の人骨は1号人骨足元の壁際に集中している。こ

れらのことから、このユニットでも遺体は風葬されており、骨化した後はその骨をさらに壁際に次々と集骨していった状況が推定できる。1号人骨はこのユニットに最後に葬られた人の可能性が高い。

白保竿根田原洞穴遺跡におけるこのような人骨検出状況は、以前に葬られていた人骨を壁際に集め、空けた空間に新しい遺体を風葬で追葬していく沖縄の崖葬墓文化と類似している（片桐, 2014）。

(3) 被葬者の区別

旧石器時代人骨群の最小個体数は約19体と推定されたが、興味深いことに、ほとんどが成人であり乳幼児は1体も含まれていない（土肥ほか, 2017）。このことは、白保旧石器人が成人と乳幼児を区別して墓に葬っていたことを示唆しており、乳幼児はこの洞穴の墓地には葬られず、別の場所に葬られていた可能性が高い。

3 南島の崖葬墓文化

(1) 琉球列島

琉球列島には岩陰や洞穴を墓とし、遺体を風葬して骨化させ、骨化後も遺骨は地中に埋めずに地上に安置する崖葬墓の存在が縄文時代から知られており、琉球王国時代にはその文化がピークを迎える。自然の岩陰や洞穴を利用するだけでなく、崖面を無理矢理掘り込んで墓としての空間を確保するものもあり、崖に墓を構築する意欲に満ちている。一つの墓に老若男女を

合葬する場合もあれば、白保竿根田原洞穴遺跡で示唆されたように未成人や乳幼児が区別される場合もある。このような崖葬墓文化は、琉球列島のみに見られるものではなく、東アジアや東南アジアの島嶼部に広がっている事例がある。

(2) 台湾

台湾蘭嶼島では海岸に突き出た岩山崖面のわずかな平場に人骨が散乱している状況を確認した。人骨の多くは失われてしまっていたが、四肢骨や遊離歯などが散乱しており、この場所を崖葬墓として利用した可能性が示唆される。

(3) フィリピン

フィリピンのミンダナオ島アユブ洞穴遺跡（紀元前後）では人骨を蔵骨器に再葬し洞穴内に安置する再葬墓が発見されている（Dizon, E. Z. & R. Santiago, 1996）。遺体を土中に埋めない文化があった可能性が示唆される。

(4) インドネシア

インドネシアのスラウェシ島タナ・トラジャでは、岩陰や洞穴を墓とし、バラバラの遺骨を複数体分まとめて合葬する葬墓制が民俗事例として存在する。遺体を土中に埋めず、岩陰や洞穴の壁際に人骨を集骨・合葬するものもあれば、蔵骨器（木棺）の中に複数体の遺骨を合葬するものもある。崖を掘り込み、墓の空間を確保して人骨を合葬するものもある。崖葬墓文化がスラウェシ島に根付いていた証拠と考えられる

（片桐, 2016）。また、スラウェシ島の東に位置するマルク諸島のハルマヘラ島では、約2,000年前の岩陰遺跡から、バラバラに合葬された多量の人骨が発掘されており（Ono et al., 2018）、インドネシアの崖葬墓文化がこの時期まで遡る可能性を示唆する。

まとめ

白保竿根田原洞穴遺跡の発掘調査によって、琉球列島では遺体を風葬する崖葬墓文化が旧石器時に遡る可能性が示唆された。そして、まだ事例は少ないものの、その崖葬墓文化は地域的には東アジアから東南アジアの島嶼部に、気候的には亜熱帯から熱帯に広がっており、琉球列島はその北縁に位置する。崖葬墓文化がいつ頃から始まり、世界的にどのような広がりがある文化なのか、興味深い課題である。

引用・参考文献

- Dizon, E.Z & R. Santiago (1996) Faces from Maitum: The archaeological excavation of Ayub Cave. Manila, The National Museum of the Philippines.
- 石原与四郎・吉村和久（2017）第3章第1節地学的評価。白保竿根田原洞穴遺跡 重要遺跡範囲確認調査報告書2—総括報告編一、沖縄県立埋蔵文化財センター、沖縄、pp. 161-164.
- 片桐千亜紀（2014）琉球列島における先史時代の崖葬墓。琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷、高宮広土・新里貴之（編）、六一書房、pp.143-156
- 片桐千亜紀（2016）インドネシア・スラウェシ島に崖葬墓文化を求めて。廣友会誌、9:82-91.
- 片桐千亜紀・土肥直美・徳嶺里江・河野礼子（2017）第2章第2節3.3-4 崖葬墓。白保竿根田原洞穴遺跡 重要遺跡範囲確認調査報告書2—総括報告編一、沖縄県立埋蔵文化財センター、沖縄、pp. 100-106.
- 片桐千亜紀（編）（2019）白保竿根田原洞穴遺跡 重要遺跡範囲確認調査報告書3—補遺編一、沖縄県立埋蔵文化財センター、沖縄。

Nakagawa, R., N. Doi, Y. Nishioka, S. Nunami, H. Yamauchi, M. Fujita, S. Yamazaki, M. Yamamoto, C. Katagiri, H. Mukai, H. Matsuzaki, T. Gakuhari, M. Takigami, and M. Yoneda (2010) Pleistocene human remains from Shiraho-Saonetabaru Cave on Ishigaki Island, Okinawa, Japan, and their radiocarbon dating. *Anthropological Science*, 118(3):173-183.

仲座久宜（編）（2013）白保竿根田原洞穴遺跡—新石垣空港建設工事に伴う緊急発掘調査報告書一，沖縄県立埋蔵文化財センター，沖縄。

仲座久宜（編）（2017a）白保竿根田原洞穴遺跡 重要遺跡範囲確認調査報告書1—事実報告編一，沖縄県立埋蔵文化財センター，沖縄。

仲座久宜（編）（2017b）白保竿根田原洞穴遺跡 重要遺跡範囲確認調査報告書2—総括報告編一，沖縄県立埋蔵文化財センター，沖縄。

Ono, R., A. Oktaviana, M. Ririmasse, M. Takenaka, C. Katagiri, and M. Yoneda (2018) Early Metal Age interactions in Island Southeast Asia and Oceania: jar burials from Aru Manara, northern Moluccas. *Antiquity*, 92(364):1023-1039.

土肥直美・徳嶺里江・片桐千亜紀・河野礼子（2017）第2章第2節3出土人骨の分析．白保竿根田原洞穴遺跡 重要遺跡範囲確認調査報告書2—総括報告編一，沖縄県立埋蔵文化財センター，沖縄，pp. 64-85.